

幼児を持つ就労母親の分離不安と養育態度の関係¹⁾

富原 一哉・永井 里奈²⁾

近年、日本でも女性の社会進出はめざましい。平成11年版「働く女性の実情」(労働省, 2000)によると, 我が国の女性の労働力率は不況によりやや減少したものの, 1980年代よりずっと50%前後の高水準を維持している。また, 年代別の労働力率は, 育児のために時間のとられる30~35歳を底とするM字カーブを描いているが, それでもこの年代の労働力率は56.7%であり, 他の年代とは逆に一貫して上昇傾向にある。これは, 結婚後も職業を持つことが当然であるという若い女性の意識が反映されたものと見なすことができる。

しかしながら, 30~35歳で労働力率が底となっている現実から分かるように, 実際に女性が出産後も継続的に働き続けることに対しては, 様々な困難が待ち受けている。たとえば保育園に子どもを預けることに対する抵抗感もその一つである。日本では当事者である母親においてすら「女性は子どもができたなら職業をやめ, 大きくなったら再び職業をもつほうがよい」という意識が根強く残っている(牧野, 1983)。この意識を支える大きな要因となっているのが「発達の初期の段階で保育園に子どもを預けると, 子どもに悪い影響があるかもしれない」という漠然とした不安である。特に「3歳までは母親と子どもにとって重要な時期であるので, 母親が育児に専業すべきだ」といういわゆる「3歳児神話」は, 一般に広く流布されており, 働く母親にとって大きな足かせとなっているようである。

この「3歳児神話」を支えているのが Bowlby (1969) の愛着の理論である。Bowlby (1969) は, 孤児院で育てられた子どもの健康や発達についての調査研究から, 母親不在や母性養育の欠如が子どもの身体的・精神的発達をゆがめると主張した。彼は, 子どもが生後3年の間に母親に対して強固な精神的絆を形

成し、その絆をもとに後の社会的適応を行うと考えたのである。しかしながら、Bowlby (1969) の理論は、完全に母親から分離され、非常に多くの代理的養育者が入れ替わり立ち替わり、充分とはいえない愛情で子どもを養育した場合を基礎にしている。このような状況と、保育園などのように1日のうちのある時間だけ固定した代理的な保育者が養育を行うことの影響とは区別して考える必要があるだろう。

実際多くの研究は、3歳までに専門の保育機関に預けることそのものが、子どもの精神的・身体的発達に悪影響を与えるという懸念を否定している。たとえば Gottfried, Gottfried, & Bathurst (1988) は、母親の就労の有無は直接子どもの認知発達、学業、社会的発達には影響を及ぼさず、むしろ母親の社会経済的地位の方が重大な影響を与えたことから、母親が就労しているときの代理的養育の質や家庭環境の方が重要であることを指摘している。また、Hoffman (1980) は就労母親の娘の方が専業主婦の娘より、就学時に独立心が高く、社会的に適応しやすいことも報告している。これらの知見により、現在では預けることそのものに問題があるのではなく、むしろ保育園で行われる養育の質や、子どもを預けることに対する母親自身の受け止め方、家族の協力といった母親の就労を取り巻く周辺の側面が子どもの発達に大きな影響を与えと考えられている。

なかでも、子どもと離れていることから起こる母親の分離不安は重要である (Hock, DeMeis, McBride &, 1988)。母親の分離不安とは子どもとの短期分離で母親が感じる不安・悲しさ・罪の意識からなる感情であり、実際に母親が子どもと分離するときや子どもと再会した場面での母親行動を説明するものである (Hock, McBride, & Gnezda, 1989; 水野, 1995)。このような分離不安は、母親自身の養育態度に影響を与え (Stifter, Coulehan, & Fish, 1993)、その態度の違いが母親の就労の影響として子どもの発達に間接的に作用する可能性は十分に考えられる。そこで本研究では、就労している母親の分離不安及びこれに影響を与える要因について調査を行い、さらに分離不安と母親の養育態度との関係を検討することを目的とした。

方 法

調査対象者：0歳から6歳までの就学前の子どもを持つ就労女性を対象とし、K市内の7つの保育園に在籍している園児の母親402名に調査を依頼した。このうち有効回答の得られた227名（61.1%）について分析を行った。

調査期間：平成11年10月25日から11月19日の間に調査を実施した。

調査手続き：調査は質問紙法により実施した。質問紙の配布、回収は保育園に依頼した。

質問紙の構成：質問紙の内容は以下の4つであった。

1. 調査対象者の年齢、家族構成、および子どもの年齢など。
2. 母親の就労状況や、就労理由、就労希望およびその理由など。
3. 母親の分離不安尺度。Hockら（1988）の作成した35項目の尺度を和訳して使用し、5件法で回答を求めた。これは「分離の不安（21項目）」、「影響の認知（7項目）」、「仕事との関係（7項目）」の3つの下位尺度により構成された（表1）。「母親の分離不安」の尺度は、子どもから離れている時の母親の心配、寂しさや罪責感のレベル、専心的な母親の世話の重要性についての考え方などを表している。分離不安が高いほどこの尺度で高得点となる。「影響の認知」の尺度は、分離に対する子どもの反応や、分離が子どもに与える肯定的・否定的影響を母親がどう認知しているかなどを表す。この尺度が高得点の場合、母親は子どもが分離を喜んでいないと感じ、分離は子どもに良くないだろうと考えていることを示す。「仕事との関係」の尺度は母親役割と仕事のバランスに関連している。母親が就労は重要だと考えている場合、母子分離は自然で必要なことなので、尺度得点は低得点になる。一方、働かないことを好む女性にとっては、仕事のために子どもから離れることはストレスになり、尺度得点は高得点になる。
4. 母親の養育態度尺度。鈴木・松田・永田・植村（1985）の養育態度尺度（30項目）を使用し、5件法で回答を求めた。この尺度は「子ども中心（10項目）」、「統制（10項目）」、「責任回避（10項目）」的かわり尺度の3つの

下位尺度により構成された（表2）。「子ども中心」尺度は「自分のことは我慢しても、子どものためにしてやることがよくある」,「私の全生活は、子どもを中心に動いている」等, 10項目で構成された。「統制」尺度は「子どもに、何事もどんなふうにしたらよいかを、事細かに言い聞かせる」,「子どもには、できるだけ私の考えどおりにさせたい」等, 10項目で構成された。「責任回避」尺度は、単なる放任ではなく、統制の仕方に一貫性がないこと、統制ができないことを内容としている。「そのときの気分次第で、子どもに決まりを押し通したり、ゆるめたりする」,「子どもの言いなりになる方だ」等, 10項目で構成された。

結 果

母親の分離不安尺度について因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行い，各因子について因子付加量 .400 以上の項目を選出したところ，第1因子においては「分離の不安」尺度の項目が，第2因子については「影響の認知」尺度の項目がほぼ対応した（表1）。したがって第1因子を「分離の不安」因子，第2因子を「影響の認知」因子とし，それぞれの因子得点を以降の分析に用いた。「仕事との関係」尺度については第3因子以降において項目が対応したものがなかったので，今回の分析から除外した。養育態度尺度についても同様に因子分析を行ったところ，第1因子に .400 以上の因子付加量を持つ項目は「責任回避」尺度に，第2因子は「子ども中心」尺度に，第3因子は「統制」尺度にほぼ対応した（表2）。よって，それぞれ「責任回避」,「子ども中心」,「統制」因子として，以下の分析には各因子の因子得点を用いた。

母親の分離不安に影響を及ぼしている要因を明らかとするため，母親の就労希望，祖父母との同居，夫の有無，子どもの兄弟の有無で群分けを行い，母親の分離不安尺度で得られた2因子の因子得点についてt検定を行った。その結果，「分離の不安」因子では就労希望 [$t(225) = 2.06, p < .05$], 夫の有無 [$t(224) = 2.44, p < .05$], 兄弟の有無 [$t(224) = 2.05, p < .05$] で有意差が認められた。すなわ

表1 母子分離不安尺度項目と因子負荷量

項目	第1因子	第2因子	第3因子
母親の分離不安			
1 子どもと離れているとき、子どもを抱いたりしてやれないことをさびしく思う。	<u>.569</u>	-.321	.310
2 私の子どもは、保母さんや保育園の先生といるときよりも、私と一緒にいるときのほうが、幸せである。	<u>.494</u>	-.155	-.362
3 私の子どもは、私が一緒にでなくては、なじみのない環境をこわがるだろう。	<u>.481</u>	.105	-.349
6 子どもから離れていると、子どものことがいろいろ気になる。(おしめがぬれているのではないか、おなかをすかしているのではないか、と気がかりである)。	<u>.675</u>	-.137	.198
7 子どもを抱いていると幸せな気分になるので、子どもから離れているときは、逆に抱くことができなくて本当にさびしい。	<u>.652</u>	-.367	.320
8 私は、保母さんや保育園の先生よりも、子どもの身の安全に気を使っている。	<u>.455</u>	-.274	-.026
9 私の子どもは、自分の世話をしてくれる人でも、私以外の人には、なかなかつかないだろう。	<u>.486</u>	.246	-.338
12 子どもから離れていると、私はさびしくて、子どもを恋しく思う。	<u>.702</u>	-.272	.256
13 母親だけが、むずがっている子どもをどのようになくさめたらよいか、知っていると思う。	<u>.466</u>	-.076	-.049
14 私の子どもを、私以外の人にまかせておくと、私の子どもはきっと泣き出すだろう。	<u>.529</u>	.294	-.258
17 私は、いつも子どもを自分の目の届くところに置いておきたい。	<u>.646</u>	-.050	.030
18 母親が、ほかの誰よりも、自分の子どもの安全に気を配っているのは、当然だと思う。	<u>.304</u>	-.369	-.006
19 私が子どもを預けて外出したら、母親がそばにいないので、子どもはさびしがっていると思う。	<u>.556</u>	.059	-.199
22 私は、子どものそばから離れたくない。	<u>.713</u>	-.048	.200
23 私の子どもは、ほかの誰よりも、母親である自分と一緒にの時間が好きである。	<u>.495</u>	-.130	-.300
24 私の子どもは、私が一緒にでないと、こわがったり、悲しんだりするだろう。	<u>.612</u>	.153	-.269
27 子どもから離れていると、子どもが泣いたり、自分を恋しがっているのではないかと気がかりである。	<u>.760</u>	-.022	.014
28 子どもと離れていると、私は、何事も楽しめない。	<u>.586</u>	.017	.227
29 私がついていないと、なじみのない環境では、私の子どもは満たされない思いをしているのではないかと気がかりである。	<u>.586</u>	.089	-.225
32 子どもを誰かに預けるのは心配である。	<u>.547</u>	.016	-.071
35 子どもから離れていると、子どもが孤独な時や悲しい時に、保母さんがうまくなくさめることができているかどうか、気がかりである。	<u>.558</u>	.112	-.189
影響の認知			
5 子どもがきちんと自立できれば、母親がいなくても、自分でうまく友達を作ることができるはずである。	-.027	.322	-.086
11 保育園や幼稚園などの集団生活は、家庭ではできないような社会的経験をさせてもらえるので、私の子どもにとって、よい経験となっている。	-.027	.378	.233
16なじみのない人や、新しい環境に、一人で慣れることができるようになるために、子どもが自分から離れてすごすのは、子どものためによいと思う。	.110	<u>.687</u>	-.138
21 私がそばを離れたときに、子どもが少し騒いだとしても、数分たてば子どもは落ち着くことが、私にはわかっている。	.092	<u>.468</u>	.140
26 子どもには、人は生来的に一個の独立した個人であるという感覚を養わせるために、私から離れて過ごすことも必要である。	.138	<u>.644</u>	-.073
31 たくさんの知らない人たちと接することは、子どもにとってためになると思う。	.115	<u>.570</u>	.004
34 幼い子どもには、母親よりも、別の人々と一緒にすごすことが必要な時期が存在すると思う。	.163	<u>.481</u>	.042
仕事との関係			
4 私の生活は、仕事なしでは充実しないと思う。	.063	.386	.381
10 子どもと離れなければならないのなら、私は、仕事がいやだと思うだろう。	<u>.571</u>	-.009	.071
15 私には、仕事において自分の経歴をどのように築いていくかという、十分な見通しがある。	-.026	<u>.408</u>	.276
20 仕事は、私に多くの満足感を与えてくれている。	.301	<u>.445</u>	<u>.433</u>
25 私は、子どもと一緒にいるためなら、仕事を後回しにしても後悔しない。	<u>.553</u>	.084	.001
30 私の子どもは要求が激しくて大変で、もっと仕事に時間を割いたら、と思うことがある。	-.308	-.125	.075
33 フルタイムで働くか、子どもと一緒に家で過ごすかを選べるとしたら、私は子どもと家で過ごす方を選ぶだろう。	<u>.460</u>	.124	<u>.484</u>

表2 養育態度尺度項目と因子負荷量

項目	第1因子	第2因子	第3因子
責任回避			
3 子どもが同じ事をしても、時によって叱ったりほうっておいたりしてしまう。	<u>.506</u>	-.182	.015
5 やってはいけないと私が言ったことを子どもがしていても、黙って見ていることがある。	<u>.451</u>	.013	-.356
7 そのときの気分次第で、子どもに決まりを押し通したり、緩めりする。	<u>.417</u>	-.294	.156
10 子どものために作った決まりを、よく変える。	<u>.441</u>	-.136	.076
15 決まりを守るようにと、子どもに強く言う日もあれば、忘れている日もある。	<u>.433</u>	-.160	.016
17 子どもの言いなりになるほうだ。	<u>.720</u>	.132	-.047
19 子どもが物を欲しがると、だめだといえない。	<u>.652</u>	.292	-.039
22 子どもが悪いことをしても、あまりとがめだてしない。	<u>.649</u>	.185	-.286
27 言いつけに対して子どもが不平を言うと、言いつけを取りやめることがある。	<u>.521</u>	.042	.058
29 子どもにがんばられて、子どもの考えどおりになりやすい。	<u>.683</u>	.172	-.019
子ども中心			
1 子どもの悩みや心配事を理解している。	-.193	.391	.066
4 子どもと一緒に、外出や旅行をするのが好きだ。	-.067	.367	-.066
8 子どもにたびたび話しかける。	-.098	<u>.569</u>	-.041
12 子どもがこわがっているときには、安心させてやる。	-.017	<u>.560</u>	-.162
14 うちで、子どもとは楽しい時間を過ごす。	.065	<u>.672</u>	-.062
18 子どもが喜びそうなことをいつも考えている。	.139	<u>.674</u>	.058
21 子どものことに、じゅうぶん気を配っている。	-.032	<u>.627</u>	.054
23 自分のことは我慢しても、子どものためにしてやることがよくある。	.196	<u>.628</u>	.100
25 自分にとって、子どもが何よりも大切だ。	.102	<u>.619</u>	.125
28 私の全生活は、子どもを中心に動いている。	.201	<u>.530</u>	.137
統制			
2 子どもに対しては、決まりをたくさん作り、それをやかましくいわなければならないと思う。	.071	.127	<u>.558</u>
6 子どものした悪いことは、みな、何かの形で罰を与えるべきだと思う。	-.051	-.010	<u>.566</u>
9 子どもが、外から時間どおり帰ってくるように、いつもさせている。	-.210	.183	.190
11 子どもの行儀をよくするために罰を与えるのは、正しいことだと思う。	-.008	.000	<u>.561</u>
13 子どもを、自分の言い付けどおりに従わせている。	-.070	-.069	<u>.626</u>
16 子どもに、何事もどんなふうにしたらよいかを、ことこまかにいいきかせる。	-.037	.233	<u>.630</u>
20 子どもがすべきことをちゃんとしてしまうまで何回でも指示する。	-.306	.195	<u>.524</u>
24 子どもには、できるだけ私の考えどおりにさせたい。	.166	-.145	<u>.514</u>
26 子どもが言いつけどおりにするまで、子どもを責めたてる。	.005	-.067	<u>.721</u>
30 子どもに、自分で物事を決めさせることはあまりない。	<u>.463</u>	.018	.245

ち、働きたくて働いている母親 ($\bar{x} = -0.056$, $n = 194$) よりも働きたくないけれど働いている母親 ($\bar{x} = 0.329$, $n = 33$) のほうが、夫が同居している場合 ($\bar{x} = -0.091$, $n = 170$) よりも同居していない ($\bar{x} = 0.282$, $n = 56$) 方が、そして子どもに兄弟がいる場合 ($\bar{x} = -0.113$, $n = 132$) よりも一人っ子 ($\bar{x} = 0.162$, $n = 94$) の方が、母親の「分離の不安」が高いことが示された。「影響の認知」の因子では有意な差は認められなかった。

また、養育態度についても同様に検討したところ、「子ども中心」の因子において祖父母との同居 [$t(224) = 2.28, p < .05$], 夫の有無 [$t(224) = 2.28, p < .05$], 兄弟の有無 [$t(224) = 2.96, p < .01$] の効果が認められた。つまり、祖父母が同居していない場合 ($\bar{x} = -0.068, n = 187$) より同居している ($\bar{x} = 0.331, n = 39$) 方が、夫が同居している場合 ($\bar{x} = -0.086, n = 170$) よりも同居していない ($\bar{x} = 0.263, n = 56$) 方が、子どもに兄弟がいる場合 ($\bar{x} = -0.163, n = 132$) よりも一人っ子 ($\bar{x} = 0.230, n = 94$) の方が、母親が「子ども中心」のかかわり方をすることが示された。他の因子に関しては有意差は認められなかった。

表3 母親の分離不安尺度と養育態度尺度の因子得点の相関

	母親の分離不安尺度			養育態度尺度	
	分離の不安	影響の認知	責任回避	子ども中心	統制
責任回避	.260**	.185**	—	—	—
子ども中心	.382**	-.378**	—	—	—
統制	.224**	-.039	—	—	—
就労時間	.003	-.116	-.217**	.015	.034
母親の年齢	-.235**	.004	-.004	-.049	-.138*
子どもの年齢	-.157*	.111	.099	-.182**	-.271**

* $p < .05$, ** $p < .01$

次に母親の分離不安と養育態度との関係を検討するために、母親の分離不安尺度と養育態度尺度の各因子得点について相関係数を算出した（表3）。その結果、分離不安の2つの因子とも「子ども中心」因子との間で絶対値0.3以上の有意でかつ中程度の相関値が得られた。したがって、母親の「分離の不安」が高いほど母親は子ども中心のかかわりをし、逆に分離の「影響の認知」を大きく捉えている母親は子ども中心のかかわりを避ける傾向にあるといえる。また「分離の不安」因子は「責任回避」、「統制」因子とも0.2以上の有意で比較的弱い相関を持っていた。したがって、「分離の不安」が高いと母親は子どもに対して責任回避的、統制的かかわりをする傾向にあるといえる。さらに、母親の就労時間、母親の年齢、子どもの年齢と母親分離不安の各因子との相関係数を求めたところ、母親の年齢と「分離の不安」因子とにおいて-.235と有意

で比較的弱い負の相関が認められた。したがって、母親の年齢が高くなると「分離の不安」は弱まる傾向にあるといえる。

考 察

母親の分離不安とそれに影響を与える要因を検討した結果から、母親の分離不安には、母親の就労希望や年齢、夫や兄弟などの家族構成が影響を与えることが示された。就労希望している母親の方が希望していない母親よりも分離不安が少ないという今回の結果は、Hockら（1988）の報告とも一致しており、これは母親の分離不安が、子どもを預けることを母親がどう認知していたかに強く影響されることを示すものと考えられる。

また、夫の同居や兄弟の有無など家族構成が影響を与えたことから、母親の不安に対しては身近な人からのサポートが重要であることも示唆される。特に夫の育児参加や就業への理解が就業母親の精神的健康に重要であることは、これまでも多くの研究で示されており（e.g., Hirsch & Rapkin, 1986; Ross & Mirowsky, 1988）、今回の結果もこれに一貫したものであるといえる。今回の結果で注目すべき点は、通常直接養育に参加できると考えられる祖父母との同居が影響を与えなかったことである。これは、身近な人からのサポートのうち、母親の分離不安の軽減に効果を持つのは、必ずしも育児に対する物理的なサポートではなく、心理的なものである可能性が高いことを示唆するといえる。

母親の分離不安と養育態度との相関分析の結果から、分離不安が高い母親は子ども中心的になり、また統制的で責任回避的になることが示された。相関分析の結果は必ずしも因果関係を示すものとは言えないので、今回の結果から養育態度の相違がそのまま母親の分離不安を原因としていると結論づけることはできない。しかしながら、養育態度尺度においても家族構成のように分離不安と類似した要因が影響を与えていたことから、分離不安を与える要因を排除していくことは、結果的に養育態度の改善にも効果を発揮するものと考えられる。

引用文献

- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss, Vol.1: Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎 他訳 1976 愛着行動 (母子関係の理論 1) 岩崎学術出版社)
- Gottfried, A. E., Gottfried, A. W., & Bathurst, K. 1988 Maternal employment, family environment, and children's development: Infancy through the school years. In Gottfried A. E. & Gottfried A. W. (Eds.), *Maternal employment and children's development: Longitudinal research*. Pp. 11-58, New York: Plenum. (佐々木保行監訳 1996 母親の就労と子どもの発達：縦断的研究 ブレーン出版)
- Hirsch, B. J., & Rapkin, B. D. 1986 Multiple roles, social networks, and women's well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1237-1247.
- Hock, E., DeMeis, D., & McBride, S. (1988). Maternal separation anxiety: Its role in the balance of employment and motherhood in mothers of infants. In Gottfried A. E. & Gottfried A. W. (Eds.), *Maternal employment and children's development: Longitudinal research*. Pp. 191-230, New York: Plenum. (佐々木保行監訳 1996 母親の就労と子どもの発達：縦断的研究 ブレーン出版)
- Hock, E., McBride, S., & Gnezda, M. T. 1989 Maternal separation anxiety : mother-infant separation from the maternal perspective. *Child Development*, **60**, 793-802.
- Hoffman, L. W. 1980 Effects of maternal employment on children's academic motivations and performance. *School Psychology Review*, **9**, 319-335.
- 牧野カツコ 1983 働く母親と育児不安 家庭教育研究所紀要, **4**, 215 - 233.
- 水野里恵 1995 母親の分離不安－母親役割観・乳児の行動的抑制傾向との関連－ 乳幼児医学・心理学研究, **4**, 17-26.
- Ross, C. E., & Mirowsky, J. 1988 Child care and emotional adjustment to wives' employment. *Journal of Health and Social Behavior*, **29**, 127-138.
- 労働省 2000 働く女性の実情 平成11年度版.
- Stifter, C. A., Coulehan, C. M., & Fish, M. 1993 Linking employment to attachment : The mediating effects of maternal separation anxiety and interactive behavior. *Child Development*, **64**, 1451-1460.
- 鈴木眞雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦 1985 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告, **34**, 139 - 152.

注

- 1) 本論文は第2著者の卒業論文 (平成11年度) のデータを再分析したものである。
- 2) 現在の所属 安田火災海上保険株式会社